

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 福井裕之

論文題目：十七 - 十九世紀の日本思想・文化における神の観念の諸相
否定的なものへの感受性の変容をめぐって

本論文は、日本思想史における神の観念の変遷を検討することを通して、否定的なもの、あるいは悪を抱えて生きることの意義が、どのように現われ、また排除されてきたかを考察する意欲的な論文である。著者によれば、否定的なものへの感受性を抑圧する契機は、18世紀以降主流となった稲作定住民の神の観念に親近的であり、またそれらの観念のなかに日本的なものを見出す解釈学的思考が、否定的なものへの抑圧を強化してきた。本論文は中世以降の神観念を、〈たたり神〉〈守り神〉〈応じたり罰したりする神〉〈苦しむ神〉〈本覚思想〉の5つに分けて、その変容を跡付けている。なかでも本論文の特徴となっているのは、仏性の万物への内在と現世の絶対的肯定を説く中世「本覚思想」が主要な問題として取り出され、その本来の用法を超えて神道や儒教にも思考様式（これを本論文は〈本覚思想〉と表記している）として広まり、時代的にも近世および近代まで影響が及んだと立論されている点である。こうして本論文は、仏教、儒教、神道といった宗教の別を超え、またトップレベルの思想家から民衆の宗教意識や通俗道徳に至るまで広く共有された観念を批判の対象とし、またこれらをもとに稲作中心の日本文化の同一性を作り出そうとする解釈学的叙述を批判することを目的とするものである。

本論文は序論および五部から構成される。序論ではまず、現代の日本社会にもつながる、悪を抱えて生きる力を失わせてしまう在り様を、神の観念の変遷に求めようとする、本論文の問題設定が示される。そして、丸山真男、和辻哲郎、中村元などのこの領域における先行研究を示したあと、これらの研究がそれぞれ立場を異にしても、いずれも稲作を中心とする民俗の国として日本を捉えていることを問題とし、それらの解釈学的な態度に疑問を呈している。また著者は、桜井好朗、中村生雄、佐藤弘夫らの研究に依拠して、日本の神々についての観念を、〈たたり神〉〈守り神〉〈罰する神〉〈苦しむ神〉などに分類する。本論文の整理によれば、〈たたり神〉は歴史を下るとともに周辺化され、中世にはまだ神観念の多様性が認められるものの、近世に至ると、〈守り神〉に一元化される傾向が強まる。この変遷は現世の肯定と、否定的なものへの排除に結びついており、これに大きな役割を果たしたのが、〈本覚思想〉であった。本論文は、島地大等に始まり、田村芳郎や

末木文美士らによって論じられている本覚思想の特徴を以下のように整理する。すなわち、人間の「一心」に仏が内在しており、さらに人間のみならず生きとし生けるものすべてが仏性を有して成仏できる存在であり、善悪、彼岸と此岸、理性と欲望といった対立をすべて無化し、現実を絶対的に肯定する思想である。そして、黒田俊雄による中世「顕密体制」論を、本覚思想の展開に深い関わりをもつものとして重視する。

第一部では、まず初期近世の武士によって奉じられた天道の観念が紹介される。天道論は個の実力による運命の開拓を勧める一方で、支配秩序を正当化し個人の分限を定めるなど両面的な性格をもっていたが、次第に<守り神>としての性格を強めることになる。続いて菅原道真が詠んだとされる「心だに」の句の、近世における解釈史をたどりつつ、この唯心論的な修法論が、通俗道德の励行論として後の石門心学や仮名草子などに広汎に浸透していったことが示される。著者によれば、天道観念の転換と同様、この「心だに」の句に由来する心の哲学にも、天台仏教から神道へと流入した本覚思想との親近性が認められる。<本覚思想>的思考の摂取は、宿業的天道観念によって差別的な身分道德を正当化する禅僧鈴木正三、また天台教学に批判的ながらも熊沢蕃山といった思想家に、宗教の別を超えて見い出される。また新井白石、貝原益軒から伊藤仁斎に至る近世思想の展開のなかに、さまざまな神の観念を残存させつつも、職分の励行、天分論など現世の肯定と、稲作中心の文化の正当化がみとめられる。

近世も18世紀になると、近世権力による宗教統制の深化とともに、思想の領域においても祖先崇拜の定着や否定的なものの排除などに特徴が見出される。第二部では荻生徂徠、安藤昌益、懐徳堂の諸思想家が扱われる。周知のように徂徠は丸山真男らによって作為の思想家として解釈されてきたが、本論文によれば、徂徠の説く礼楽刑政とは、官僚的なシャーマニズム（鬼神説と関連する）を伴った職能的身分制論であり、<心>よりも<形>を重視するタイプの<本覚思想>の系譜に属するとされる。また幕藩体制を批判した安藤昌益においては、その自然観において「草木国土悉皆成仏」との本覚思想的な現実絶対肯定の思想が継承されており、とりわけ米をもって諸価値の根源とする稲作中心主義が顕著であり、これらがアマテラス信仰へと結実することが示される。また近世中期に大坂で開設された懐徳堂では、富永仲基、中井竹山、山片蟠桃らの町人思想が展開するが、本論文によれば、しばしば画期的な学問論（富永）や無鬼論（山片）などで注目されるこの学派も、結局は祖先崇拜や通俗道德の励行へと傾斜し、<本覚思想>的伝統を破ることはなかった。

第三部では、国学系の思想が論じられる。本居宣長にあっては、世界で生起する出来事の多くは人力の及ばない「幽事」であるとされ、<守り神>に尽きることはない、<たたり神> <荒ぶる神>などの非合理的な要素が再来している。しかし、結局のところ宣長が目指すのは、このような否定的なものの復権ではなく、歌を通じて<荒ぶる神>を「あはれ」と思わせ、それを馴致すること以上ではなかった。宣長は<本覚思想>的伝統への批判者として評価されるケースもあるが、本論文によれば、宣長はすべての悪を黄泉の国に

帰着させ、アマテラスを<守り神>として中心化してゆく。一方、平田篤胤の国学は、妖怪、怪異、仙境、幽明等を扱う不可解な神話学と見なされてきたが、このような彼の冥界への関心は、オオクニヌシおよびその親神であるスサノオの重視、また「山人天狗」論など、否定的なもの結びついている。しかし本論文によれば、平田においても<守り神>化の傾向が見られ、天狗信仰も現世利益的なものに置きかえられている。そして天皇家の御霊と仏教上の悪霊とは区別され、「神胤」による祖先崇拜としての天皇崇拜が位置付けられることになる。平田は<本覚思想>的な性格をもつ仏教の救済論を批判したが、本論文によれば、むしろ両者は近く、神国思想的に変容した<本覚思想>を確立したとされる。

第四部では、近世、近代の庶民信仰を中心に、本覚思想的伝統との関連が検討されている。まず石門心学について、禁欲的な経済倫理であるという説を退け、本論文は、「心」よりも「形」を重視する、保守的で現世に順応的な教説であるとし、また民衆的な石門心学者たち（布施松翁、中沢道二ら）は、流行のからくり人形に由来する着想から、天道概念を安楽に解釈する傾向を示し、結局<本覚思想>的側面を強めることになる。これらに対し、富士講、黒住教、なまず信仰、ぬけ参り、ええじゃないか、のような民衆信仰、また中山みき、出口なおら女性の宗教者が開いた信仰には、否定的なものの噴出や<たたり神>あるいは<苦しむ神>的なものの持続が見出され、これらが「形」よりも「心」を重視する異端の<本覚思想>的系譜を作り出したとされる。

最後の第五部では、明治の思想家における宗教論が取り扱われ、西周、福沢諭吉、加藤弘之、内村鑑三らが論じられる。本論文によれば、これらの思想家にはそれぞれの立場を超えて現実絶対肯定の<本覚思想>的側面が見出されるとされる。たとえば優勝劣敗を主張した加藤のみならず、因果応報的な天道論や「安心の法」論によって「新日本の文明富強」を正当化した福沢にもそれが見られる。一方、内村はキリスト教の神による因果応報を踏まえ、現世利益に傾く日本の多神教を批判するとともに、渡米後はアメリカ文明をも糾弾した。しかし、本論文によれば、そのような批判を可能にしたものは、内村による農耕を基本とする日本人の国民性の肯定であり、これはまたイスラエルと日本の同祖性の主張へと帰結している。

以上のように、本論文は「否定的なもの」をテーマとして、日本の中世以来の思想全体を再検討しようとする壮大な試みである。その意義はまず、思想史、歴史学、民俗学などの学問的境界を超えて、広大な領域に亘る文献や資料、研究文献を読み解き、広い意味での日本の思考様式について、ひとつの像を提示した点に求められる。また、本論文のもうひとつのテーマと言うべき肉食禁忌の思想を稲作中心主義との関連で批判的に辿ったことや、さまざまな民俗学的エピソードに立ち立ったことも、本論文をいっそう興味深いものにしていく。思想史の対象について言えば、これまで多くは、仏教、儒教、神道、キリスト教のように宗教ごとに論じられてきたのに対し、本論文は宗教の別を横断した主題を設定して、各宗教に通底する特徴を見出している。こうして本論文は、日本思想において超

越的なものが解消される態様を、歴史的また構造的に、雄大な視野で論じる成果を挙げたと言っている。さらに、論文冒頭で触れられていたように、否定的なものを抱えて生きる力の喪失という、現代の深刻な問題性を歴史的に明らかにしようとした点でも意義を認めることができる。

しかし同時に、このようなテーマ設定の壮大さが、いくつかの欠点を本論文にもたらしめていることも否定できない。たとえば本論文は丸山真男の古層論を、日本的なものの解釈学的同一性を構成するものとして批判しているが、〈本覚思想〉の通底を指摘し、日本思想における否定的なものの排除を宗教の別を問わず、また通時的に見出す本論文は、著者の意図に反して、一層乗り越え困難な日本的なものの同一性、もうひとつの「古層」を発見することになってはいないか。また、このような批判の枠組みのために、各々の思想家に対する批判が、ともすれば単調な繰り返しに終わっていると思われる部分も散見される。そして肝心の（本義および拡張を含めて）本覚思想の内容が多義的であり、論文が展開するにつれてこの伝統が、「形」と「心」、また保守的なものと異端的なものに区別されるようになるのは、この思想伝統に多様性を取り込もうとする点で評価される面もあるが、逆に同一の思想伝統で括ってよいかとする疑問をも生じさせる。

しかし、以上のような欠点や疑問は、本論文が困難な課題に挑戦し、多方面に亘る問題提起とともに、独自の日本思想史像を構成したことの多大な価値と比較すれば、小さなものにすぎない。それゆえ、本審査委員会は、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしい業績として認めるものである。